

春・濤沸湖に集中するオオハクチョウの様変りに付いて

玉 田 誠

晩秋から初冬に掛けて、濤沸湖を經由して繁殖地から越冬地へ渡るオオハクチョウ (Cygnus cygnus) の数は4千羽乃至5千羽と推算されている。この秋の渡りの期間中濤沸湖に憩うオオハクチョウの数が3千羽を越える日が2週間以上に及ぶ年も稀ではない。又中春、越冬地を出発して繁殖地に向かうオオハクチョウの中で濤沸湖を經由する数は晩秋におけるその数よりは幾分少なめであり、最大羽数が観察されるのは4月の下旬、20日から24・5日の間であった。

しかし、最近十数年間の調査結果を見ると、濤沸湖を經由して南下する秋のオオハクチョウの数に比べて、春の北上期のオオハクチョウの数が著しく減少しており、最大羽数が2千羽にも達しない年が多くなっているばかりではなく、最大羽数を示す月日も不安定になっている。且つは、濤沸湖の湖面を覆っている氷が50パーセント以上融けることが最大羽数を予想する一つの目安となっていたが、最近ではそうした目安は全く通用せず、4月上・中旬の1千羽前後という値がその年の最大羽数を示して終わってしまう年さえ出現している。又、秋の南下期には全く利用することのない濤沸湖の東端部の仮称(浦士別湖)が春の北上期にのみ利用されている事実もかなり以前より指摘されてきた。

春の北上期における濤沸湖周辺地域の調査結果、濤沸湖を利用しない数に見合う程度のオオハクチョウが分散して飛来していることが判明した。濤沸湖では10数羽の「走り」的北上群が姿を見せる頃、これらの湖・沼・川などについての概要は次のとおりである。

- 1) 網走支庁管内では網走湖の女満別湖畔とポントー地区、佐呂間湖東端の常呂町内の柴浦地区、同・浜佐呂間地区および同キムアネツ地区等であって、既に10数羽乃至数100羽が飛来して憩っている。
(以上述べた地域は晩秋の南下期にはオオハクチョウは殆ど憩わない所である。特にキムアネツでは毎春給餌している所であるが、秋には立ち寄らないと言う。)
- 2) また、この時期、釧路支庁管内の塘路湖・シラルトロ湖や厚岸湖にも100羽乃至500羽程度が飛来して憩っており、火散布沼や藻散布沼・琵琶瀬川にも少数羽が飛来している。
- 3) その後10日乃至20日程度の後には、「その地域での越冬群の大半が飛去するか・ほかの地域に移動した」根室支庁管内の春別川河口域(尾岱沼)や野付湾の北部・風連湖、及び釧路支庁管内の達古武沼や塘路・シラルトロ湖、釧路川の弟子屈市街貫流域、屈斜路湖等にも姿を現わす。
- 4) この頃には、濤沸湖の周辺地域の小麦畑にも数百羽が飛来している。早期に飛来するものはほとんどが結氷している濤沸湖を利用しないで、他に移動するが後期に飛来する群は濤沸湖の仮称(浦士別湖)にのみ偏在して憩い、これらの殆どは他の群と共生することはない。濤沸湖を最も遅く飛去するのは此の群れである。

又少数羽が隣の斜里川にも飛来する。

以上の1)～4)に見たオオハクチョウの大部分に共通する特長は、首から頭部にかけて黒褐色に汚

れていることである。又、このオオハクチョウは湖沼に隣接する田んぼで落ち穂を拾い、小麦畑でその芽や根を食するすべを心得ているのも特徴的であって、「はみ出し」と呼んで別カウントしている。秋季、道東（北海道東部）の湖沼川ではこのような首汚れ（のハクチョウ）を見掛けることはないから、越冬地に滞在中に生じる一時的な汚染であろう。又一時的汚染であれば彼女たちの越冬地を同定することは困難ではない。関係する調査資料としては、会報V。1. 13のP 18～P 22を参照して欲しい。（濤沸湖には「走り」的オオハクチョウが飛来している初春の釧路及び根室支庁管内の湖沼川における調査結果である）。

以上これを要するに、晩秋の南下時には濤沸湖を利用するオオハクチョウも越冬地では分散越冬を余儀なくされ、汚染の進んだ湖沼で越冬したものが「首汚れ」になり、早期に飛来してまだ開水域の狭小な濤沸湖では「はみ出し」のかたちでその回りで菜食し、他の湖沼川に移動するか、或は直接的に他の湖沼川に飛来して憩う様になったものと考えられる。